
決められ世界で…

nori

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

決められ世界で…

【Nコード】

N2828P

【作者名】

n o r i

【あらすじ】

決められた世界、決められた自分。

その中で、自ら決めた道へと進む学生達の物語。

PROLOGUE

「杉田、…」

担任が一人ずつ生徒の名前を呼んでいる。呼ばれた生徒は教卓へ向かい通知表を取りに行く。

先生は生徒に一言、二言声をかけそれを配っていた。

その間に他の生徒たちは緊張：はしてはいないだろう。おそらく明日から始まる夏休みが待ちきれないのだろう。担任もあまりの五月蠅さに時々注意していた。

そう明日からは俺たちが進学してから最初の夏休みである。受験と言う名の戦いを乗り越え、華の学園生活へと踏み込んだ俺たちにとって初めての長期休暇ともなれば、夏のこの暑さなんてものは気にならないくらいテンションも上がるといふものだ。

かくゆう俺もその一人である。

「それにしても、蝉うるせえなあ。」

などと相手を求め、約一週間という短い期間を懸命に鳴く蝉に愚痴をこぼしつつ、今日の午前の行事が終わるのを今か今かと待っていた。

『嫌だ!』

ふと言葉が俺の中でこだました。俺は周りを見渡しクラスメイトたちの顔をうかがった。

「ん、どうかしたか?」

後ろにいたクラスメイトが尋ねてくる。

「あつ、いや、何でもない。」

俺は前に向き直した。クラスメイトの誰かが悲惨の通知表を渡されうなだれているのかと思ったが違ったようだった。

「…またか…」

何ら変わらない日々。こうして俺の進学して最初の学期を終えて

いくのだと思っていた。

「人は生まれながらにして決まっている。」 小学校の総合の時間に配られた教科書の冒頭に書かれていた言葉、たぶんこの国のすべての人が知っているだろう言葉。

俺もそう聞かされてきたし、教えられてきた。それを証明するようこの世のすべての人には『二つ名』が与えられる。二つ名と言っても『新宿の夜王』などではなく、『表す者』、『伝える者』などといったアバウトな表現である。

『二つ名』はその人のもつ能力から付けられる。『伝える者』は話術や詩など他人に思いを伝えることに特化している人に与えられる名とされている。このあまりに大雑把とも言える決め方の所為か、同じ『二つ名』を持つ人は少なくはないが、すべて同じ力であるとは限らない。

この国の検査方法も発展したと言われているが、未だに能力に対して詳しく知ることとは出来ないらしい。

俺も『聴く者』という名を付けられている。能力は聴覚の特化ということらしい。確かに人より耳はいいと思うが自分では普通のことなので実感があまりない。その気になればイルカの声が聞けるとかなんとか調査結果には出ていた。実際には聞いたことはないし別に聞きたくもない。

それより俺が気にしているのは…

『もう、嫌だ』

これである。体全体に響くような感覚。検査には出ていなかったもので詳しいことはわからないがどうやら俺は人の思っていることが聞こえるらしい。初めて聴いたとき自分が怖くなった。相手のことが解ってしまうほど怖いことはないだろう。

だが、自分から干渉することはできないし、相手がその一つを考えない限り聞こえることはまずない。

「はずなんだ…けど、最近多いよなあ。前は一ヶ月に一度聞くか

聞かないかだったけど、今週に入って4回目、…多いよなあ」

明らかに多かった。能力は生まれつきのものであって発達することはないと証明されている。まあ、どんな実験をしたのかはあまり考えたくない。

「ってことは、相手だよなあ」

人それぞれ思うところがあるのだろうと流そうとしたが少し気がかりでもあった。

「それにしても部活…ってまだ部活でもないか、愛好か…いっていても人数足りねえし、光^{ひかる}に頼めば一人ぐらいすぐに入るだろうけど、穀^{つよし}の奴怒るだろうなあ、…どうすっかなあ」

などと短いようで長かった半日を終え、新たな生活とともに始めたクラブ活動について考えながら俺は部室へ向かっていた。

『死に…たい』

「えっ!!」

突然聞こえた言葉に思わず声が出た。周りには人はいない。

「空耳じゃ…」

『ここから、飛び…降りれば』

「ないよな」

人は都合のいいように考えをまとめようとするが、そうわさせてもらえなかった。

深く考える前に俺は走り出していた。どうしても思ったが、俺に聞こえたってことは本当に死にたいと思ってたってことで、だとしてらそいつは確実に。

「…自殺する!」

そのことを口にした途端体が震えた、手には汗をかいていた。

幸いこの学校には屋上は一つしかない、飛び降りるとしたら多分そこだろう。放課後の教室は部活で使われない限り鍵が閉まっている。

誰もいなくなった階段を駆け上がって行く。その間にも声は聞こえていた。

「えっ…、くそ。」

聞こえたただ一つの声が俺を加速させた。

バン！

「えっ」

屋上のドアを開けると同時に声が聞こえた。

屋上には柵を越えたところに一人の女の子が振り返っていた。ふと目が合った長く伸びた髪を風になびかせる彼女の目はルビーのように深く赤く吸い込まれるようだった。

俺は間に合ったと思いほっとした。

「おい、お前そこでな…」

「来ないで。」

一歩近づいた俺に彼女は叫んだ。

「来ないでって、そんなところにいたら危ないだろ、だから…」

「来ないでって言うてるでしょ。」

近づこうとする俺を彼女は睨み付けた。威圧感のある睨みに俺は一瞬目を逸らしてしまった。

「…ほらね、あんたも同じ。」

「えっ…」

彼女の突然の言葉を俺は理解出来なかった。

「同じって？」

俺は聞き返す。

「私が怖いでしょ？」

「いや、そんなこと…」

「嘘ね。だってさっき目、逸らしたでしょ？」

彼女の声は冷たく尖っていた。

「あんたも皆と同じ。怖がって、噂して、決めつけて。仕方ないよね、だって私の目は普通じゃない。赤いでしょ？血の色みたいでしょ？私はねいろんなものを見透かしちゃうの。すごいでしょ？怖いでしょ？あんただってそう思ってるんでしょ？……でもね。」

彼女の声は徐々に震え出していた、そして次第に俯いていく。

「：しだって、私だって好きでこんな目をしてる訳じゃない。」

柵を持つ彼女の手は震えていた。

俺は一度躊躇ったが口を開いた。

「だから、死ぬってのか？」

「そうよ、悪い？知ってる？人はね、生まれた時から決まってるの。私のこの目は変わらないのよ。」

顔を上げた彼女は泣いていた。そして俺はその涙の意味を知っていた。

「それでも、死にたくないんだな。」

自分でも驚くほど落ち着いた声が出た。

「はっ？あんた人の話聞いてた？」

彼女は一瞬驚いたような顔をしたが直ぐさま俺に怒鳴り散らしたが、俺も負けじと声を張った。

「聞いてたよ、全部。」

「だったら何で…」

「お前の声が聞こえたから。」

彼女は驚きと同時に口を閉じた。俺はここぞとばかりに話を続けた。

「俺の二つ名は『聴く者』だ。どんな小さな声でも聞こえるし、人が思ってることも聞こえる。何でも見透かすだ？相手の本音が解るのはお前だけじゃない。人は生まれた時から決まってる？そんなもん誰だって知ってる。でもな、決まってるのは力だけだ。別に将来が決まってる訳じゃない、変わらない訳じゃない。怖いと思ってる奴らの考えだって変えられる、別に時間がかかたって俺が協力してやる。愚痴だって自慢だってなんだって聞いてやる。なんたって俺は『聴く者』だからな。」

俺は威張ってみせた。腰に当てた手は震えていた、そしてその手を握りしめ叫んだ。

「だから、自分に、死にたくないって思ったことに嘘なんかつく

な。」

俺の一方的な言葉に彼女はポカンとした顔をしていたが、ゆつくりと膝から崩れその場にしゃがみ込んでしまった。

「ちよっ、おまつ！」

彼女がしゃがんだ場所は柵の向こう側、俺は慌てて駆け寄り肩を掴んだ

「だ、大丈夫か？」

「ははっ、なんなのよ…あんたは…」

彼女は肩を振るわしながら泣き声であきれた様に愚痴ってきた。

「だから言ってるだろ。俺は『聴く者』だって。」

冗談を言いつつ俺は彼女を起こし柵を越えた。

決められた世界、決められた自分。それでもまだ不確かで。

そんな世界で俺たちは出会い生きていく。

そして、まだ決まっていない明日へ進むと決めていく。

WITH

夏休み初日、A・M・10・00。照りつける太陽の中、俺は学校の前に立っていた。俺はそれほど頭は良くないが悪いという訳ではない。学校の勉強にもついていけないわけ、別に補習授業というわけではない。そんな俺がなぜこんな処にいるのかというと、それは昨日のことである。

「…携帯。」

柵を越えたの後、落ち着いた彼女が言った。

「えっ、携帯？もしかして落としたとか。」

俺は慌てて下を見に行こうとした。だが、彼女はそんな俺の服を掴み止めた。

「違う。…あ、あんたの。」

「えっ、俺の？あるけど…これが？」

いまいち状況が掴めない俺に彼女がぶっきらぼうに言った。

「協力してやるって、あんたが言ったんでしょ。」

「言っただけ。それと俺の携帯に何の関係があんだよ。」

「だから、その…あ、アドレス教えてって言ってんの。」

おれはやっと理解した。なるほど、メールでこれから相談してほしいということらしい。それにしてもなんと解りにくい要求なんだろう。もっと解りやすく言えばいいのに。とは思ったが、女の子から初めてアドレスを聞かれた俺にとっては嬉しさのあまりそんなことはどうでもよかった。それに不器用そうに言う彼女が少しかわいく見えた。

「なによ。」

少し見すぎていたのだろう、怒られてしまった。

「えっあ、なんでもない。…ほら。」

俺はごまかしようにして彼女にアドレスを教えた。そしてこれが

俺の日常を変えていく決め手だったのだろう。少しずつの変化に気がつくのにはそれほど時間は掛からなかった。

翌日 A・M・7・00。俺の枕元の目覚まし時計よりも先に携帯が鳴り響いた。

休みの朝ぐらいいはゆっくりと寝ていたいというのは学生の本望だろう。ましてや今日からは夏休み、初日を一日寝過ごしたとしてもまだ終わらない休みを堪能することはできる。

「うるせえなあ。」

寝ぼけながらも携帯へと手を伸ばしていた。電話が鳴れば無意識で出るのは現代人の習性だろうか。などとゆっくりと回る頭で考えながら携帯を耳にあてた時だった。

「もしも…」

「ちよつと、遅いわよ！何コール目だと思ってるの？最低3コールぐらいで出なさいよ！！」

あまりにも突然かつ理不尽なモーニングコールに寝ぼけから少しずつ回復していた俺の思考回路は完全に停止した。

「ちよつと、聞いてんの？」

しかし、相手からの通話はつ続いており、俺は脳をフル稼働させて答えた。

「…どちらさまでしょう？」

「……」

「……えっと」

「あんたもう昨日のことわすれたの！？ひよこだって育てた親くらい覚えるわよ。」

しばしの沈黙の後。思いっきり怒鳴られた。しかも、訳も解らない例え付きで。人を鳥頭以下とでも言いたいのだろうか。いやでも育てられるぐらいのことがあれば誰だって忘れることはないだろうよ。無理矢理起こされたあげく怒鳴られた俺はムツとした。

「藍よ、相場あいば 藍らん。その…昨日、屋上で…」

「相場…藍?…昨日…屋上…」

…『死にたい』俺はふと思いついた。

「…よけいなことまで思い出した。」

「えっ、なんか言った？」

つい口に出てしまった言葉をごまかす様に話を変えた。

「えっと、それで相場さん。どうしたの？相談事なら何でも聞
くよ。」

「…ごまかした。」

あからさま過ぎたようだ。

「まあいいわ。それであんた今日暇？休みに入ったばかりだし、
ろくに予定も入ってないんでしょ？」

どうせ今日は昼間で寝ようとしてたとかでしょ。」

凶星だった。でもここで素直に答えてはけないと俺の第六感が囁
いた。

「いやぁ悪い。今日は彼女と約束しててさぁ。夏休みの初日はデ
ー…」

「嘘ね。あんた彼女なんていないでしょ。」

思いつき否定された。彼女がいないのは事実だが昨日会ったば
かりの奴に言われたくはなかった。

「そんなことどうしてお前が知ってんだよ。昨日会っただけでそ
んなことが解る訳がな…」

「私の二つ名は『見る者』よ。」

「……」

「……」

解る人だった。その瞬間俺の言い訳兼発言権はなくなってしまっ
た。

「で？暇よね。」

断言されてしまった。こうなってしまえばどうにも出来なかった。

「暇…です。」

夏休み初日。俺は自分の無力さを知らされた。

「…暑い。それにしても、遅えなあ。」

ただいまA・M・10・15。呼び出した張本人は来ていない。

今朝の電話で観念した俺に。

「んじゃ、今日の朝10時に学校前に集合ってことで。来なかったら、そうねえ…。公衆トイレにあんたの個人情報知ってる限り全部書くから。」

などと合法にもならない脅しをかましてきた。俺はもう諦めていた。

「で、なんで学校なんだよ、呼び出しでもあったのか？」

「はあ？そんなのあるわけないでしょ。私たちが両方知ってる場所なんて学校ぐらいのでしょ？それともなに？私の家の前の公園って言ったらあんた解るの？」

どうやらこいつの家の前は公園らしい。知らなくてもいい情報を手に入れてしまった。

「知るわけないだろ。」

「でしょ。まっ、知ってたら知ってたで引いてたけどね。ってことで、学校に10時。絶対来なさいよ。」

ピッ！

「…なんなんだ。」

朝から言いたいことを言われ続けたあげく一方的に電話を切られ、何も出来ず今に至っている。

立ちっぱなしで疲れた俺はその場にしゃがみ込んだ。

「だいたいなんなんだよ、朝から。…相談にのるとは言ったけど…」

「何こんなところで一人しゃがんでブツブツ言ってるのよ。通報されるわよ。」

記憶に真新しい声が聞こえてきた。俺は今朝から溜に溜めた思い

を打ち明けようと口を開いた。

「あのなあ、いったい誰の所為でこんな…」

立ち上がりながら見上げたそこには、しゃれたサンダルにきれいのクロップドパンツ、ニットチュニックとカットソーの重ね着、頭には覗き込まなければ顔がはつきり見えないくらいキャップ帽を深々と冠る相場さんがいた。別にそれほど派手ではないがどこか彼女には存在感があった。

なにより、昨日は制服で築かなかったが彼女のスタイルが良かった。いや、拔群だった。コンビニにおいてあるファッション雑誌の表紙を飾る子に負けてはいないだろう。いやむしろ勝っていると思う。俺は思わずかわいいと思いついてしまった。

「…なによ。もしかして、暑さで頭やられた？」

前言撤回。かわいくなかった。俺は言いそびれたことを再び口にした。

「おまえなあ、ひどすぎるだろ、それは。遅れてきたくせになんだよその言い草は」

「なによ、ちょっと遅れたくらいで。男なら『待ってないよ』ぐらいの度量見せないよ。」

逆ギレされた。今回の俺に非は全くもってないがこのまま言い合えば平行線になると思ったので俺は我慢した。

「で、こんな時間に呼び出していったいなんの…」

「うゝん」

事情を聞こうとした俺の周りの一周しながら彼女は全身をなめるように見回し唸っていた。

「…な、なんだよ。」

そんなに見られれば誰だって緊張してしまう。ましてやこんなかわ…。

俺は一瞬思いかけたことは間違いであると自分に言い聞かせた。

「まっ、合格かな。」

「はあ？」

葛藤中に意味の分からないことを言われたので思わず素頓狂な声を出してしまった。合格？なにが？

「それじゃ、行くわよ。」

俺の思考がついていく暇を与えることなく彼女は歩き出した。

俺はすぐ後を追いつける。

「い、行くなってどこに？」

「買い物。」

彼女は振り返らずにそう言った。

「買い物？何なんだよそれ？俺に荷物持ちでもしろってのか？冗談じゃねえ。だいたいなんでこの俺がお前なんかの…」

「いやなら帰きなさよ。」

彼女は前を向いたまま怒鳴った。

「なっ、お前っ。」

あまりにも理不尽な発言に我慢の限界であったが、立ち止まった彼女の方が微かに震えている様に見えた。その姿が昨日の彼女と重なって見えた俺はそれ以上何も言えなかった。

「…協力するって言ったもんな。」

俺は彼女に聞かれない様に呟くと、彼女の背中を軽くたたいた。ポン！

「ちょ、なにすん…」

「それで、まづどの店から行くんだ？まあ、今日は一日暇だからな。気が済むまでつきあってやるよ。」

「……」

「……」

「さ、最初からそう言えばいいのよ。」

手で顔をを擦り、振り向いた彼女の目は昨日と同じ赤く輝いていた。でも今の彼女は笑っていた。

俺の言葉で笑ってくれるなら、こんなことで二度とあの言葉を聞かずに済むのなら。自分が甘いと思いつつ、俺たちは彼女が気にな

ってたという雑貨屋に行こうと決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2828p/>

決められ世界で…

2010年12月10日18時45分発行